

教育研究等活動業績

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
サヤナキ ノボ 佐柳 信男	男	1970年	教授	人間文化学部人間文化学科 人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(教育学)	専門分野	教育心理学, 発達心理学, 社会心理学	
学 歴	1989年	3月 埼玉県立松山高等学校 卒業		
	1989年	4月 国際基督教大学教養学部理学科 入学		
	1991年	4月 国際基督教大学教養学部教育学科へ転科		
	1993年	3月 国際基督教大学教養学部教育学科 卒業		
	1993年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程 入学		
	1995年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程 修了		
	2000年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程 入学		
	2007年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程 修了		
実 務 経 験	1995年	4月 イー・エー・ユー株式会社 ラジオ番組制作担当(至 1998年12月)		
	1999年	1月 フリーランスにて通訳業・翻訳業(至 2012年3月)		
	2002年	4月 NTT東日本関東病院附属高等看護学院 非常勤講師(至 2007年3月)		
	2006年	4月 国際基督教大学 COEリサーチ・アシスタント(至 2007年3月)		
	2007年	4月 国際基督教大学 COEリサーチ・フェロー(至 2009年3月)		
	2007年	4月 国際基督教大学教育研究所 研究員(現在に至る)		
	2007年	9月 実践女子大学教職課程 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2008年	4月 明星大学人文学部 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2008年	4月 明星大学通信教育部 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2008年	4月 国際基督教大学社会科学研究所 研究所助手(至 2012年3月)		
	2009年	4月 山梨英和大学人間文化学部 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2012年	4月 山梨英和大学人間文化学部 准教授(至 2021年3月)		
	2012年	4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科 准教授(兼任)(至 2021年3月)		
	2016年	4月 東京女子大学大学院人間科学研究科 非常勤講師(至 2020年3月)		
	2021年	4月 山梨英和大学人間文化学部 教授(現在に至る)		
	2021年	4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科 教授(兼任)(現在に至る)		
	2021年	9月 慶應義塾大学文学部 非常勤講師(2023年3月まで)		
受 賞 歴	2019年	7月 2019年度山梨英和大学ベスト・エデュケーター賞		
	2022年	12月 国際開発学会 賞選考委員会特別賞		
	2022年	12月 日本パーソナリティ心理学会 優秀大会発表賞		
所 属 学 会	2001年	1月 アメリカ心理学会 Student Affiliate -2008, International Affiliate 2009-		
	2002年	4月 日本教育心理学会 会員(現在に至る)		
	2003年	4月 日本心理学会 会員(現在に至る)		
	2004年	4月 日本発達心理学会 会員(現在に至る)		
		同 ニュースレター委員(2008年1月~2009年12月)		
		同 ニュースレター委員会 副委員長(2009年1月~2009年12月)		
		同 国際研究交流委員(2011年1月~2012年12月)		
		同 ソーシャル・モチベーション研究分科会 理事(2011年4月~現在に至る)		
		同 ソーシャル・モチベーション研究分科会 事務局長(2021年4月~現在に至る)		
	2007年	4月 日本応用心理学会会員(現在に至る)		
	2009年	4月 日本子育て学会(現在に至る)		
		同 広報委員(2010年4月~現在に至る)		
		同 広報委員会 副委員長(2021年4月~現在に至る)		
	2011年	4月 日本社会心理学会(現在に至る)		
	2013年	4月 日本パーソナリティ心理学会(現在に至る)		
	同 第23回大会実行委員(2013年11月~2014年10月)			
	同 『パーソナリティ研究』編集委員(2019年8月~)			
2014年	2月 国際開発学会(現在に至る)			
2015年	1月 Human Development and Capability Association(現在に至る)			
特免資 許許格 等・・・	年	月	特になし	
e-mail	年	月	非公表	

目 次

○教育業績

- 教育理念、方針、方法
- 教育能力
 - 教育方法実践例
 - 作成した教科書、教材等
 - 教育方法や実践に関する発表、講演等
- 担当授業科目
- 代表的なシラバス
- 教育改善活動
- 教育能力に対する評価

○研究業績

- 研究の特徴
- 研究経歴
- 研究実績
 - 著書
 - 学術論文
 - その他の研究活動
- 競争的資金採択課題
- 学会等発表、役員参加
- 共同研究・受託研究の実績
- 大学院生指導
- 研究能力に対する評価

○サービス活動業績

- 学内委員会・作業部会等活動実績
- アドバイザー活動実績
- 後進育成活動実績
- 社会貢献活動

○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

- 専門的成果
- 専門的目標

○添付資料

略

教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生の自律性を育てることを目指して指導に取り組んでいる。「自律性」とは、自分にとって意義のある目標・目的を設定し、それを達成するために必要な手段を検討して実行することだと考える。日頃の教育でいえば、授業内容は学生に手段を伝達することに該当し、学生の理解度を確認しながら理解のしやすさと挑戦のバランスを図っている。目標・目的の設定についても、学生のニーズを確認しながら、教育内容としても十分のものになるよう心がけている。また、大学においては課外活動も自律性の育成に重要な役割を果たすと考えており、部活動やサークル活動の顧問を引き受け、活動を通して学生が有意義な教育的体験を得られるよう支援しているつもりである。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>大人数の講義科目では反転授業を行っている。Googleクラスルーム上に講義の動画や関連の資料を事前に配信し、授業当日は質疑応答と小テストを実施する。質問は事前にGoogleクラスルームなどで募る。毎回、時間内に回答し終えない量の質問が出ており、時間内に未回答の質問については資料を配信して回答する。小テストの回答人数は登録者の9割以上であり、定期試験の平均点も以前よりも向上しているため、効果的な授業だと考えている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>多くの授業において市販されている教科書も利用しているが、独自の補助教材も作成している。講義においてはパワーポイントを利用し、文字情報だけでなく、オーディオ、画像、ビデオなどのマルチメディアを活用している。また、その日のレジュメには授業内容の他に、授業内容と関連した発展学習のための書籍やホームページを紹介し、受講生が理解度を確認するために利用できる練習問題も掲載している。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>佐柳信男. (2015). 発達心理学の実践に資する学びを促進する授業および成績評価のあり方. 日本発達心理学会第26回大会ラウンドテーブル「発達心理学の「理論」と「実践」を結ぶ: 教育実践において「教え」と「学び」をいかにつなぐか?」話題提供.</p> <p>佐柳信男. (2017). 多様な学生が参加するグループワークにおけるピットフォールとその防止. 日本発達心理学会第28回大会ラウンドテーブル「アクティブラーニング型授業の教育効果について考える: 大学における授業内グループ活動を話題にして」話題提供.</p>
担当授業科目	<p>2022年度:【学部】基礎ゼミナール, 心理学研究法, 心理学実験, 発達心理学, Psychology in English, 多文化共生論, インターンシップ(子育て支援), 専門ゼミナール, 卒業研究</p> <p>【大学院】心理学研究法特論, 修士論文</p>
代表的シラバス	<p>発達心理学</p> <p>【概要】</p> <p>人間は生涯にわたって変化し続ける存在です。その変化は十人十色・千差万別にも見えますが、法則性もあります。その法則性を明らかにしてきた学問が、発達心理学です。この授業ではまず、児童期までに私たちが身に付けてきている特徴や能力がどのような過程で現在の自分を構成しているのか、その発達の過程について講義します。多くの皆さんがいる青年期の発達の問題、そして老年期までのライフコースについても理解を深めるための題材を用意します。受講生の皆さんがこれからの人生において、この授業で扱う理論が周りの大人や子どもを理解することの助けとなればよいと考えています。</p> <p>この授業は反転授業で行います。受講生は授業時間までに1)教科書の当該箇所を通読、2)事前配信した動画を視聴、3)その他に配信された資料を視聴・通読した上で授業時間に臨みます。授業時間は質疑応答と小テストを行います。質疑応答の質問は対面でも受け付けますし、事前にクラスルームでも匿名で募ります。講師が質問に答えた場合は質問者の授業参加点に加点します。小テストは事前の講義や教科書の内容に加え、質疑応答も出題範囲とします。</p> <p>毎回の授業においてGoogleフォームを使用したリアクションペーパーで受講生の疑問や感想を募り、次の授業で補足します。</p> <p>なお、初回授業のみは通常の講義形式で授業概要のオリエンテーションを行います。</p> <p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 発達心理学における発達のとらえ方を理解し、説明できるようになる。 2. 主要な発達理論を理解し、実際の子どもや大人に適用して説明できるようになる。 3. 青年期までの子どもに着いて以下の発達課題や理論を説明できるようになる。 <ol style="list-style-type: none"> 3-1. 年齢に応じた標準的な発達の特徴を理解し、説明できるようになる。 3-2. 主要な発達理論を適用してさまざまな行動を説明できるようになる。 4. 青年期以降の以下の発達課題や理論を理解し、それぞれの課題達成に必要な条件を説明できるようになる。 <ol style="list-style-type: none"> 4-1. 青年期におけるアイデンティティ発達、仲間関係 4-2. 職業選択およびキャリア発達 4-3. 親としての発達 4-4. エイジズムと老年期の発達
教育改善活動	<p>毎回の授業において独自に作成したコメントシートに回答してもらっている。質問では、①当日の授業内容の確認、②当日の授業内容についてわかりにくかった箇所、および③授業内容と関連して現在興味を持っているトピックを尋ねている。</p> <p>①と②については、授業内容の教授方法が適切だったかどうかを確認する役割を果たす。伝わり方が不十分だった場合や受講生の誤解が多い場合は、次の授業の質疑応答の時間において補足をするとともに、次年度以降の授業内容にも修正を加える。</p> <p>③については、受講生の興味・関心を確認する役割を果たす。受講生から見てより関心の持てるトピックやエピソードの発掘や、より受講生が興味を持てる伝え方の考案に役立っている。</p>
対教する能力価に	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>授業評価アンケートでは、どの授業もほぼすべての評価項目において高い評価を得てきた。自由記述の内容も概ね好評である。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>授業評価アンケートに基づき、2019年度ベスト・エドゥケーター賞を受賞。</p>

研究業績

研究の特徴	<p>自律的な動機づけを促進する要因について研究している。これまでは特に小中学校および学習塾における目標構造が学習動機づけに与える影響を中心に取り組んできた。現在は、引き続き学習塾の学習動機づけへの影響についての共同研究に参加しているほか、学業に対する自律的動機づけの観点から留学生の適応についての個人研究や、発展途上国での開発援助事業における被援助者の行動変容についての研究に取り組んでいる。</p>
研究経歴	<p>2004年 研究課題『こころの平和と安全に寄与するコンピテンスと自律性支援の役割』で2004年度国際基督教大学COE大学院生研究奨励金を受領(50千円)</p> <p>2005年 研究課題『こころの平和と安全に寄与するコンピテンスと自律性支援の役割』で2005年度国際基督教大学COE大学院生研究奨励金を受領(300千円)</p> <p>2006年 国際基督教大学COEリサーチ・アシスタント 小学生の学習における自律的動機づけを促進する要因としてのコンピテンスと自律性支援に関する研究に従事(至 2007年)</p> <p>2007年 国際基督教大学COEリサーチ・フェロー 小・中学生の学習塾通いが学習動機づけにおよぼす影響に関する研究に従事(至 2009年)</p> <p>2007年 国際基督教大学教育研究所研究員 大学生の自律的な学習動機づけを促進する要因に関する研究に従事(現在に至る)</p> <p>2008年 研究課題『塾へ通うことの個人的・社会的効用』で2008年度日本教育大学院大学特定研究費助成金を共同で受領(黒石憲洋・佐柳信男・高橋誠: 150千円)</p> <p>2009年 研究課題『学校教師および塾講師の比較研究: サービス受給者と経営者の視点を通して』で2009年度日本教育大学院大学特定研究費助成金を共同で受領(黒石憲洋・佐柳信男・高橋誠: 150千円)</p> <p>2012年 山梨英和大学人間文化学部准教授 学習塾の学習動機づけへの影響に関する研究, 大学生の自律的な学習動機づけを促進する要因に関する研究, 留学生の異文化適応に関する研究についての研究に従事(現在に至る)</p> <p>2013年 国際協力機構JICA研究所「主体性醸成のプロセスと要因にかかる学際的研究: 中南米における事例を中心に」において研究分担者(現在に至る)</p> <p>2013年 厚生労働省平成25年度セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業「コミュニティー・カルテ・システムを利用した生活困窮者の実態把握と政策効果測定」(株)オープン・シティ・研究所受託事業)政策効果測定事業担当者(至2014年3月)</p> <p>2015年 国際協力機構(JICA)農村開発部「自己決定理論に基づく市場志向型農業振興アプローチにおける心理面・行動面の変容分析～ケニア国地方分権下における小規模園芸農民組織強化プロジェクト(SHEP+)を通して～」主研究者(現在に至る)</p> <p>2016年 JST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協カプログラム(SATREPS)「肥沃度センシング技術と養分欠乏耐性系統の開発を統合したアフリカ稲作における養分利用効率の飛躍的向上」分担研究者(現在に至る)</p> <p>2018年 総合地球環境学研究所研究プロジェクト「高環境負荷に対処する地域イノベーションと社会的受容性」メンバー(現在に至る)</p> <p>2022年 国際協力機構緒方貞子研究所研究プロジェクト「アフリカ小農民の商業化による貧困緩和の実証研究(SHEP(小規模園芸農民組織強化プロジェクト)研究)」研究課題「SHEPアプローチのさらなる効果向上の要因を究明する心理学研究」担当者(現在に至る)</p>

研究 実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. Sayanagi, N. R. & van Egmond, M. C. (2023). Self-determination theory and international development. In R. M. Ryan (ed.) <i>Oxford handbook of self-determination theory</i>. Oxford University Press.【分担執筆】</p> <p>b. Sato, M., Sayanagi, N., & Yanagihara, T. (2022). <i>Empowerment through agency enhancement: An interdisciplinary exploration</i>. Singapore: Palgrave Macmillan.【共著】</p> <p>c. 佐柳信男, 首藤久美子・相川次郎・浅岡真紀子. (2016). 人が動き, 育つ農業・農村開発プロジェクト: 心理学・自己決定理論を参考にした効果的な能力開発のための事例集. 独立行政法人国際協力機構農村開発部. 【監修, 分担執筆】 【英語訳】Sayanagi, N. R., Shuto, K., Aikawa, J., & Asaoka, M. (2016). <i>Introduction to the psychology of international cooperation: Seventeen motivation case studies from the field</i>. Tokyo: Japan International Cooperation Agency. 【仏語訳】<i>Psychologie approfondie de la coopération internationale: Dix-sept cas de motivation recueillis sur la terrain</i>. Tokyo: Japan International Cooperation Agency. 【西語訳】<i>Introducción a la Psicología de La Cooperación Internacional: Diecisiete estudios de casos de motivación recogidos de campo</i>. Tokyo: Japan International Cooperation Agency.</p> <p>d. 佐柳信男. (2008). 第2章 エフェクタンスと自律性. 小谷英文(編)『ニューサイコセラピー—グローバル社会における安全空間の創成 (ICU COEシリーズ第3巻)』. 東京: 風行社, 29-46. 【分担執筆】</p> <p>(2) 学術論文(単著もしくは第一著者であるもののみ)</p> <p>a. Sayanagi, N. R., Randriamanana, T., Razafimbelonaina, H. S. A., Rabemanantsoa, N., Abel-Ratovo, H. L., And Yokoyama, S. (2021). Development of a motivation scale in rural Madagascar: The challenges of psychometrics in impoverished populations of developing countries. <i>The Japanese Journal of Personality</i>, 30, 56-69.</p> <p>b. 佐柳信男. (2017). 「貧困の罠」を打ち破る: 援助プログラム裨益者の自律的動機づけと時速可能な行動変容の促進に関する心理学的理論仮説. <i>国際開発研究</i>, 26, 25-50</p> <p>c. Sayanagi, N. R. (2017). Breaking the poverty trap: Facilitating autonomous motivation for sustainable behavioral change in developmental aid recipients. JICA Research Institute Working Paper, 151. (https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/publication/workingpaper/wp_151.html)</p> <p>d. 佐柳信男. (2016a). 山梨県内における養育者の子育てに関する悩みと要望: テレビ番組視聴者アンケートの自由記述から. <i>山梨英和大学紀要</i>, 14, 43-53.</p> <p>e. Sayanagi, N. R., & Aikawa, J. (2016). The motivation of participants in successful development aid projects: A self-determination theory analysis of reasons for participating. JICA Research Institute Working Paper, 121. (http://jica-ri.jica.go.jp/publication/assets/JICA-RI_WP_No.121.pdf)</p> <p>f. 佐柳信男. (2015). 農業普及における自律的動機づけの役割: 効果的な技術移転のために. <i>農業普及研究</i>20, 29-34, 58-64.</p> <p>g. 佐柳信男・市川健. (2012). 学習動機づけと学習行動との関係を調整する要因としてのマインドフルネス. <i>ソーシャル・モチベーション研究</i>6, 28-39.</p> <p>h. 佐柳信男. (2009). 学習塾通いが小学生の勉強に対する動機づけにおよぼす影響. <i>国際基督教大学学報 I -A教育研究</i>51, 55-63.</p> <p>i. 佐柳信男. (2007a). 日本の小学生の勉強における認知された因果性の所在を測定する質問紙尺度の作成. <i>ソーシャル・モチベーション研究</i>4, 63-82.</p> <p>j. 佐柳信男. (2007b). 自律性を促進・調整するコンピテンスの役割: 小学生の勉強行動と動機づけに着目した実証的検討. <i>国際基督教大学教育学研究科提出博士論文</i>.</p> <p>k. 佐柳信男・小谷英文・川村良枝. (2005). 児童の日常課題に対する認知された因果律の所在及び児童-教師関係. <i>国際基督教大学学報 I -A教育研究</i>47, 67-86.</p>
----------	---

<p>研究実績</p>	<p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>【国際会議発表】 Sayanagi, N. R.; Randriamanana, T., Razafimbelonaina, H. S. A., Rabemanantsoa, N., Abel-Ratovo, H. L., and Yokoyama, S. (2019). Motivation and Psychological Need Satisfaction in an Aid Project in Madagascar: The Challenges of Developing Psychometric Scales in Developing Countries. Paper presented at the 7th International Conference on Self-Determination Theory at Hotel Zuiderduin, Egmond aan Zee, The Netherlands.</p> <p>Fujikake, Y. & Sayanagi, N. R. (2016). A model of subjective empowerment evaluation and its extension by psychological analysis. Paper presented at 2016 Human Development & Capability Association at Hitotsubashi University.</p> <p>Sayanagi, N. R. (2015). Breaking the poverty trap: Facilitating autonomous motivation for sustainable behavioral change in developmental aid beneficiaries. Paper presented at 2015 Human Development & Capability Association at Georgetown University.</p> <p>Sayanagi, N. R., Aikawa, J., & Asaoka, M. (2016). The relationship between motivation and outcomes in developmental aid projects: Implications from an SDT-based approach in Kenya. Paper presented at 6th International Conference on Self-Determination Theory at Victoria Convention Centre, Victoria, BC, Canada.</p> <p>【翻訳書】 a. White, R. W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. <i>Psychological Review</i>, 66, 297- 333. (ホワイト, R. W. 佐柳信男(訳). (2015).モチベーション再考:コンピテンス概念の提唱. 東京:新曜社.)</p> <p>b. Pepperberg, I. M. (2008). <i>Alex and Me: How a Scientist and a Parrot Uncovered a Hidden World of Animal Intelligence - and Formed a Deep Bond in the Process</i>. New York: Harper Collins. (ペーパーバーグ, I. M. 佐柳信男(訳). (2010).アレックスと私. 幻冬舎.) (ペーパーバーグ, I. M. 佐柳信男(訳). (2020).アレックスと私. ハヤカワ文庫NF.)</p> <p>c. Atalay, B. (2004). <i>Math and the Mona Lisa: The Art and Science of Leonardo da Vinci</i>. Washington D. C.; Smithsonian Books. (アータレイB. 高木隆二・佐柳信男(訳). (2006).モナ・リザと数学—ダヴィンチの芸術と科学. 京都:化学同人.)</p>
<p>競争的資金採択課題</p>	<p>JST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)「肥沃度センシング技術と養分欠乏耐性系統の開発を統合したアフリカ稲作における養分利用効率の飛躍的向上」分担研究者(2016-2023年)</p>
<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>【国内学会発表】(最近6年間の単独発表もしくは第一発表者の業績のみ)</p> <p>2022年 12月 佐柳信男・切金利恩. 育児自己効力とパートナーのサポートが母親の育児不安に及ぼす影響:就業形態による影響の違い 日本パーソナリティ心理学会第31回大会ポスター発表.</p> <p>2022年 11月 佐柳信男・堤 志穂. 自由の喪失による父親の発達:幼児の父親における制約感と親としての発達の探索的検討 日本子育て学会第14回大会ポスター発表.</p> <p>2021年 6月 佐柳信男. 開発援助における主体性(agency)の心理測定の課題と展望. 国際開発学会第22回春季大会企画セッション「人が自ら動くための条件:主体性醸成プロセスを「見える化」する」口頭発表予定.</p> <p>2019年 6月 Sayanagi, N. R. A comparison of farmers' motivation towards training programs in Kenya and Madagascar: Differences explained by psychological need support. Paper presented at Joint International Conference 2019 of Japan Association for Human Security Studies and Japan Society for International Development at Komaba Campus, the University of Tokyo.</p> <p>2018年 9月 Sayanagi, N. R., Randriamanana, T., Razafimbelonaina, H. S. A., Rabemanantsoa, N., Abel-Ratovo, H. L., And Yokoyama, S. Psychological measurement of motivation in development aid programs: Findings and challenges from a farmer training program in Madagascar. 日本心理学会第82回大会ポスター発表.</p> <p>2018年 9月 佐柳信男・中村彩乃. 大学生の SNS 利用と心理的ウェルビーイングの関係:主要SNSの影響の比較. 日本教育心理学会第60回総会ポスター発表.</p> <p>2018年 6月 佐柳信男. マージナライズされた対象者の自律性が発揮される条件:心理学の理論および研究法の開発研究への適用の可能性とその課題. 国際開発学会第19回春季大会企画セッション「人が自ら動くための条件:主体能力の涵養とウェルビーイング」口頭発表.</p> <p>2018年 3月 佐柳信男. 日本発達心理学会第29回大会ラウンドテーブル「援助要請研究と動機づけ研究のインターフェイス」企画責任者・ファシリテーター.</p> <p>2017年 9月 佐柳信男・若林 藍. 四則演算課題の遂行を促進する簡易呼吸法の効果. 日本心理学会第81回大会ポスター発表.</p> <p>2017年 3月 佐柳信男. 多様な学生が参加するグループワークにおけるピットフォールとその防止. 日本発達心理学会第28回大会ラウンドテーブル「アクティブラーニング型授業の教育効果について考える:大学における授業内グループ活動を話題にして」話題提供.</p>

共同研究・受託研究の実績	<p>2005年 4月「行為の記述・推測・判断における文化的要因:国際比較と国内変動の総合的研究」平成17～18年度文部科学省科学研究補助金(基盤B, 研究代表者:東洋)における研究協力者(至 2007年3月)</p> <p>2013年 4月 国際協力機構JICA研究所「主体性醸成のプロセスと要因にかかる学際的研究:中南米における事例を中心に」における研究分担者(現在に至る)</p> <p>2013年 厚生労働省平成25年度セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業「コミュニティー・カルテ・システムを利用した生活困窮者の実態把握と政策効果測定」(株)オープン・シティ・研究所受託事業)政策効果測定事業担当者(至2014年3月)</p> <p>2015年 国際協力機構(JICA)農村開発部「自己決定理論に基づく市場志向型農業振興アプローチにおける心理面・行動面の変容分析～ケニア国地方分権下における小規模園芸農民組織強化プロジェクト(SHEP+)を通して～」主研究者(現在に至る)</p> <p>2017年 JST-JICA地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)「肥沃度センシング技術と養分欠乏耐性系統の開発を統合したアフリカ稲作における養分利用効率の飛躍的向上」分担研究者(現在に至る)</p> <p>2018年 総合地球環境学研究所研究プロジェクト「高環境負荷に対処する地域イノベーションと社会的受容性」メンバー(現在に至る)</p> <p>2022年 国際協力機構緒方貞子研究所研究プロジェクト「アフリカ小農民の商業化による貧困緩和の実証研究(SHEP(小規模園芸農民組織強化プロジェクト)研究)」研究課題「SHEPアプローチのさらなる効果向上の要因を究明する心理学研究」担当者(現在に至る)</p>
大学院生指導	<p>山梨英和大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻 修士論文担当教員(2012年度～現在に至る)</p> <p>提出指導論文題目の例:</p> <ul style="list-style-type: none"> 『心配の個人差と精神的健康の関係:心配の内容と時間の検討を通して』 『小学生における教員とスクールカウンセラーが持つ連携に対する期待とその実態』 『大学生の友人関係における過剰適応:精神的健康および本来感との関係に着目して』 『身体醜形懸念と母親の養育態度の関連:自己愛に注目して』 『幼児におけるいざこざと向社会的行動の生起過程:自由遊び場面の観察を通して』 『青年の劣等感に対するコーピング:劣等感コーピングと適応の関連』 『随伴性自尊感情と劣等感が不登校傾向に与える影響』 『マインドフルネスが達成目標と本来感に与える影響』 『放課後等デイサービスにおける保護者のニーズに心理職が対応できる可能性』 『育児における父親の心理的体験:父親の基本的心理欲求の充足・不満に影響を与える要因の検討』 『養育者による体罰の要因の検討と体罰防止介入の効果検証:ポジティブ・ディシプリン・プログラムを用いて』
研究能力評価に対する	<p>子育て支援研究では、指導した卒論生、切金利恩の卒業論文に基づくパーソナリティ心理学会第31回大会での発表『育児自己効力とパートナーのサポートが母親の育児不安に及ぼす影響:就業形態による影響の違い』が大会優秀発表賞を受賞した。</p> <p>開発援助・国際協力における心理学の研究と応用は世界的にも珍しく、耳目を集めている。佐藤峰・柳原透と共著の『Empowerment through agency enhancement: An interdisciplinary exploration』が国際開発学会2022年度賞選考委員会特別賞を受賞した。また、自己決定理論創始者のRichard Ryan氏からの依頼により、同氏が編纂した『Oxford Handbook of Self-Determination Theory』に1章を共著で寄稿した。</p>

サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等活動実績</p>	<p>2012年 4月 山梨英和大学人間文化学部 心理社会コースコーディネーター (現在に至る)</p> <p>2013年 3月 山梨英和大学セキュリティ・ポリシー ワーキング・グループ(至2014年3月)</p> <p>2014年 4月 山梨英和大学宗教委員会委員(2020年3月まで)</p> <p>2014年 4月 山梨英和大学FD・SD推進委員会委員(2019年3月まで)</p> <p>2014年 4月 山梨英和大学大学院FD・SD推進委員会委員長(至2015年3月)</p> <p>2016年 4月 山梨英和大学COC+子育て支援コースリーダー(現在に至る)</p> <p>2016年 6月 山梨英和大学FD・SD推進委員会委員長(2019年3月まで)</p> <p>2018年 4月 山梨英和大学進路指導主任(2019年3月まで)</p> <p>2020年 3月 山梨英和大学遠隔授業プロジェクトチームリーダー(2021年3月まで)</p> <p>2021年 4月 山梨英和大学宗教委員会委員(現在に至る)□</p> <p>2021年 4月 山梨英和大学進路部担当長(現在に至る)</p>
<p>アドバイザー活動実績</p>	<p>2020年度卒業論文『育児自己効力とパートナーのサポートが母親の育児不安に及ぼす影響:就業形態による影響の違い』をパーソナリティ心理学会第31回大会で発表し、大会優秀発表賞を受賞した。</p> <p>その他これまでに指導した卒業論文の題目の例:『血液型ステレオタイプにおける外集団均質化効果について』『青年期におけるSNS利用状況とアイデンティティの関連性:一般的な傾向と性差と文化差の検討』『講義時にSNS及びゲームを使用する動機』『高校時代のクラスおよび部活の目標構造が大学生の動機づけに与える影響』『仮想的有能感と不登校傾向の関連』『呼吸法による複雑作業への促進効果』『ヴィジュアル系バンドマンのファンの心理:行動から見る愛情表現』『一般学校に在籍する自閉症スペクトラム児に対する小学校教員の授業指導の在り方』『大学生のSNS利用が人生満足度と自己肯定感に及ぼす影響』『担当動物と死別した飼育員のコーピング』『恋愛関係崩壊によるストレス関連成長:原因とコーピング方法に注目して』『イベント時における記述的規範がごみ捨て行動およびごみの分別行動に及ぼす影響』『寿司におけるネタと皿の組み合わせによる美味しさ認知と価格認知の違い』</p>
<p>後進育成活動実績</p>	<p>日本発達心理学会ソーシャル・モチベーション研究分科会理事として、若手研究者の発表・育成の場として月例の研究会および運営委員会に参加(2012年4月～現在に至る)</p>
<p>社会貢献活動</p>	<p>(1)講演会</p> <p>2013年 6月 山梨県私立中学高等学校PTA連合会 平成25年度PTA研修会において講演『自発的なモチベーションを引き出すには』</p> <p>2014年～ 毎年10回 JICA「Market-Oriented Agriculture Promotion for Officers in Africa」コース程度 講師『Facilitating Intrinsic and Autonomous Motivation in Program Participation: The Theoretical Bases and Practical Applications of SHEP's Psychological Approach.』</p> <p>2014年 12月 JICA能力強化研修「市場志向型農業(SHEP)推進フォローアップ」コース講師『SHEPにおける心理学的側面:自律的動機づけ促進のしかけ』</p> <p>2015年 12月 JICA能力強化研修「市場志向型農業(SHEP)推進フォローアップ」コース講師『SHEPにおける心理学的側面:自律的動機づけ促進のしかけ』</p> <p>2015年 5月 山梨県芸術文化協会 平成26年度会員研修会において講演『芸術活動の教育と伝承におけるモチベーションの役割』</p> <p>2015年～ 6月～ 山梨英和プレストンこども園/笛吹市子育て支援センターえいわ子育て講演会</p> <p>2016年 7月 全国稲作経営者会議 第32回若い稲作経営者研究会夏期研修会講師『農業従事とモチベーション:自己決定理論の考え方』</p> <p>2016年 10月 笛吹市立一宮北小学校PTA学習会『自立のための自律性を育てるには』</p> <p>2017年 1月 明治大学情報コミュニケーション研究科 学際研究特別講演『モチベーションの質と行動とウェルビーイング:自己決定理論の概要』</p>

社会 貢 献 活 動	2017年	1月 中部大学心理コロキウム『国際協力の心理学: 貧困削減に心理学が貢献できること』	
	2017年	4月 JICAマダガスカル国別研修生活改善アプローチ講義『動機づけを引き出す心理学 (Psychologie pour stimuler la motivation)』	
	2017年	6月 山梨県峡東地域教育推進連絡協議会子育て講演会『「押しつけ」にならずに「教育」するには? : 自発性の育ち方と育て方』	
	2017年	9月 山梨学院大学「子育て支援演習」ゲストスピーカー『子育て支援の大切さをマスコミで伝える』	
	2018年	7月 山梨県峡南地区異校種連携セミナー講演『教育の中で自発性を育む』	
	2018年	9月 国際基督教大学学生寮オープン・レクチャー『人の「やる気」を引き出すためのヒント: 寮運営やサークルで人に動いてもらうには』	
	2018年	10月 山梨学院大学「子育て支援演習」ゲストスピーカー『子育て支援の大切さをマスコミで伝える』	
	2018年	12月 山梨県生涯学習推進センター 生涯学習講座 ココロとカラダの健康講座 『「やる気」の心理学: 人と自分の「やる気」を高めるには』	
	2019年	6月 国際基督教大学大学院『社会問題と政策』オープン・レクチャーにてゲスト・レクチャー	
	2019年	8月 杉並少年ラグビースクール 講習会 講師『「やる気」の心理学: 良質のモチベーションを引き出す』	
	2019年	9月 国際基督教大学学生サービス部ワークショップ講師 「人の「やる気」を引き出すためのヒント: 寮運営や クラブ・サークルで 人に動いてもらうには」	
	2019年	10月 甲州市公立保育所部会研修会講師「子育て支援と親支援のカギとしての自律性支援」	
	2019年	12月 山梨英和大学心理臨床センター 地域連携セミナー講師「自分と周りの自発的なモチベーションを引き出してみんなハッピーに！」	
	2019年	12月 山梨県立育精福祉センター 研修会講師「心理欲求を支え、子どものこころを支える」	
	2021年	5月 甲府市立国母小学校母親学級講師「子どもの自律的なモチベーションを引き出すためのヒント」	
	2022年	4月 富士吉田市家庭教育学級講演「折れない心の育ち方: ほめれば良いわけではない！」	
		(2) 出前講座	
		2012年	6月 山梨英和高等学校 大学模擬授業『道徳ってどういうこと? -心理学の考え方-』
		2013年	10月 山梨県立甲府東校等学校ミニ大学模擬授業『どうすれば“やる気”が出るの?』
		2015年	10月 長野県赤穂高等学校 模擬授業『どうすれば“やる気”が出るの?』
		2016年	10月 長野県赤穂高等学校 模擬授業『道徳心の発達心理学』
		2018年	10月 甲府城西高等学校 上級学校連携講座 『乳幼児に見えている世界: 驚きの能力, 不思議な間違い』
		2020年	10月 甲府東高等学校 ミニ大学『子どもの思いやりの育ち方: 共感性と道徳性の発達心理学』
		2021年	6月 山梨英和高等学校 大学模擬授業『モチベーションの心理学』
		(3) 公開講座	
		2013年	5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『心理学入門講座』
		2014年	5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『心理学入門講座』
		2014年	6-7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『はじめての心理学』
		2015年	5-6月 山梨英和大学メイプルカレッジ『はじめての心理学』
		2017年	9-10月 山梨英和大学メイプルカレッジ『モチベーションの心理学』
		2018年	7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『日常生活を豊かにする心理学』 『子どもの自発的な: 学習意欲を引き出す』
		2019年	6月 山梨英和大学メイプルカレッジ『日常生活を豊かにする心理学』 『自発的なモチベーションで仕事が捗り, 心も健康に!』
		2021年	11月 山梨英和大学メイプルカレッジ『モチベーション(やる気)の心理学』□
	2022年	10-11月 山梨英和大学メイプルカレッジ『モチベーション(やる気)の心理学』□	

社会 貢 献 活 動	(4)学外審議会・委員会等	
	2017年	4月 独立行政法人国際協力機構(JICA)小規模農家向け市場志向型農業振興(SHEP)にかかる国内支援委員会 委員(現在に至る)
	(5)その他	
	2007年	4月 ICU教育セミナー世話人会 世話人(現在に至る)
	2010年	4月 国際基督教大学同窓会 評議員(現在に至る)
	2010年	8月 国際基督教大学第二男子寮OB会 会長(現在に至る)
2013年	7月 YBSテレビ『子育て日記』コメンテーター(現在に至る)	

成果と目標

専門的成果	<p>① 国際協力の心理学という新規領域の確立に向けて理論的な基盤を整理し、実証的な裏付けも得始めている。</p> <p>② 従来、学業や訓練プログラムにおいては自律性支援的な働きかけが一律に自律的動機づけを促進するとされてきたが、コンピテンス(習熟度)の低い者には自律性支援は効果が薄く、むしろコンピテンスを高める支援が必要であることを示唆する実証的資料を得た。</p> <p>③ 学習塾の動機づけへの影響についてはこれまでに実証的な研究は行われていなかったが、学習塾通いが動機づけに大きな影響を与えておらず、むしろ家庭の影響が大きいとの実証的資料を得た。</p> <p>④ 小学生における内発的動機づけの発達過程についての実証的資料を得た。</p>
専門的目標	<p>① 教育およびその他の文脈における自律的動機づけの促進要因をさらに明らかにすること。特に、コンピテンス(習熟度)の低い対象における自律的動機づけの促進要因の究明が大きな課題である。</p> <p>② 自律的動機づけの促進に関連する心的メカニズムの究明。</p> <p>③ 実践的な志向を持つ研究者の育成。</p> <p>④ 開発援助事業に資する動機づけ仮説の提出および検証。</p>

作成基準日	2023年3月31日
-------	------------